東北学院の生んだ知られざる偉人山川丙三郎――ダンテ『神曲』翻訳を巡る旅――

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下館, 和巳 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/572

東北学院の生んだ知られざる偉人山川丙三郎
—ダンテ『神曲』翻訳を巡る旅—

下　館　和　巳

『神曲』

Nel mezzo del cammin di nostra vita
mi ritrovai per una selva oscura,
ché la diritta via era smarrita.

これが、ダンテ『神曲』の冒頭である。そして、この三行こそが古今東西の人々の心をつかんできた。

このイタリア語の語順の通りに、つまり原文の息遣いにそって日本語にしてみると、「真ん中で（ネル メッツォ）道の（デル カミン）私たちの命の（ディノストラ　ヴィッタ）」となる。読者の「私」が、語り手の「私」と重なって、「道の真ん中に」いるような気がするのは、物語にいきなり入り込む伝統的な技法「イミディアスレス」と「私」ではなく「私たち」（ノッストラ）の「命」と書かれているためだ。私がいるのは「暗い森」（ウナ セルヴァ オスクーラ）の中だ。それも「まっすぐの道を失って」。「真ん中で、道の、私たちの命の、私は気がつけば暗い森の中にいた、まっすぐの道を失って」

2000年、英国人が選んだ1000年間の最高の書物は『神曲』である。英語では“The Divine Comedy”、イタリア語の“La Divina Commedia”の英訳だが、実のところ、ダンテ自身が付けたタイトルは、“Commedia”である。後世、ダンテを崇拝していたボッカチオが“divina”「偉大な」を加えたとも言われている。日本語訳『神曲』は、ドイツに留学していた森鴎外がドイツ語訳を読んで付けたものと考えられている。しかし、ダンテの原題通り日本語にすれば『喜曲』であろう。

全曲で14233行。地獄篇“Inferno”34曲、浄火編“Purgatorio”33曲、天国編“Paradiso”33曲。総計100曲は、ダンテ自身の壮大な異界の旅の記録である。地獄滞在時間は、意外なほど短く24時間。浄化の山を登るのにかけた時間は79時間。そして、空間的に考えれば、地獄と浄火は地球の一部に過ぎないが、天国は無限の宇宙そのもので、旅の時間は不明。

山川丙三郎の目に触れた最初のダンテは、ケアリーの次の英語訳と思われる。

In the midway of our mortal life
I found me in a gloomy wood,astray
Gone from the path direct.

そして、日本で最初に『神曲』「地獄篇」完訳を果たした山川の記念すべき日本語訳はこう始まる。

われ正路を失ひ、人生の羈旅半ばにあたりて
とある暗き林の中にありき

この山川訳は岩波文庫に収められている。現代日本では最も高い評価を受けている日本語訳であるが、しばしば批判の対象になるのは、日本語の難しさだ。この冒頭の漢字にルビがないことから察知できるように、訳語をどう読んでよいかわからないところが多い。まず、「正路」を「せいろ」と多くの読者は読むであろう。「しょうろ」「まさみち」とも読める。しかしいずれも音読すると、意味が曖昧になる。私は、山川訳『神曲』全曲を読み終えて、この冒頭の三行に戻った時、翻訳していた山川の頭の中には「ただしきみち」という音が響いていたのではないかと思った。根拠はない。直感だ。

『神曲』は散文ではなく、テルッツア・リーマという形式の韻文で書かれている。「翻訳者は反逆者なり」という山川自身の言葉があるが、詩として

のイタリア語を日本語に翻訳する時に、「意味に優先順位が置かれ、音が犠牲になることは致し方ない」という不文律のようなものに抗いながら原文に向かっていた山川に、いたるところで遭遇する。

仙台の南鍛冶町に住んでいた山川の家をしばしば訪れた山川の長女恵さんの友人高橋田鶴子さんの「よく二階の書斎から、イタリア語と日本語を声にしているのが聞こえてきた」という言葉が示唆するのは、“Commedia”を詩としての日本語『神曲』に再生させようとしていた山川の姿である。

ダンテ・アリギエリ

ダンテの名は、デュランテ・アリギエリ。デュランテとは「耐える人」という意味であるから示唆深い。ちょうど750年前の1265年、イタリア半島の中部より北寄りにあるフィレンツェに生まれた。家はローマ法王派のゲルフ党に属していた商家で、ダンテ自身は、35歳の時に、都市国家フィレンツェの三人の最高指導者の一人に選ばれたが、汚職の罪で罰金、懲役2年、公職永久追放という屈辱的な宣告を受けて、流浪の人となった。

ダンテには恋人がいた。ベアトリーチェ。9歳の赤い服をまとったベアトリーチェにダンテは心を奪われ、18歳の純白の服を着たベアトリーチェに再会して、ベアトリーチェへの思いは神格化される。しかし、ダンテは死によって24歳のベアトリーチェを奪われる。人はだれもがいつかは死ぬが、自らの死を悲しんで苦しむことはできない。私たちの死とは、愛する人の死によってのみ感じられる。ダンテの素朴で真摯な問いかけが聞こえる「ベアトリーチェはどこにいったのか？死ぬとは無になることか？いやちがう、肉体は消えるが、魂は在る場を変えてほかの場に移行するだけだ。それでは、どこに？」。ダンテは生きる意味を失ったような喪失感におそわれる。その人がいなければ、ここにある意味がないと。また会いたい、一目でよいから会いたい、という激しい渇望がダンテを動かす。

『神曲』の冒頭に佇むダンテは、そこにいなければ自分らしく生きること

ができない故郷を失った空虚感と、その人がいなければ生きる意味を見いだせない喪失感の中にいる。『神曲』のエートスは、途方に暮れて森の中にいるダンテを天国から見守っている目を、旅の最初の時点で私たち読者に教えていることにある。ダンテは、豹、獅子，狼の三匹の獣によって前に進むことを阻まれる。しかし、その姿を天国から見たマリアとルチアそしてベアトリーチェの連係プレーによって、イタリア語ではヴィルジリオ（ラテン語ではウェルギリウス、英語ではヴァージル）が、ダンテを救済するために地獄の入り口の手前のリンボウから呼び出されてダンテの前に現れる時、私たちは神の存在というものに絶対的な確信を持っているダンテを感じないではおれない。

ダンテは、ダンテの庇護者となったカングランデへの手紙の中で、自らの叙事詩を“Commedia” と名付けた訳を、「あらゆる種類のすさまじい葛藤に始まって幸福の局を結ぶ歌」と書いているが、その言葉の通り、ダンテの旅は、地獄と言う恐怖の谷から一歩一歩抜け出して浄火の山を登って魂を清め、ダンテに注がれ続けた視線の根源である神に出会って幸福になることで終わる。

『神曲』をキリスト教の視点から論ずる時に、「ダンテは、旅の導き手として、なぜ敢えて異教徒のヴィルジリオを選んだのか？」ということが問題になる。ダンテ神学の拠り所となっていた『神学大全』の著者トマス・アクィナスではだめだったのか、異教徒ならば、むしろアリストレスがふさわしい、と議論は尽きない。しかし、私は一つの答えとして、ケンブリッジ大学のカークパトリック教授の次の考え方にある説得力を見出す。

「論文も詩もラテン語で書かれていた時代に、ダンテは自分の故郷フィレンツェの方言トスカーナ語で書いた。それは、一体何を意味していたのか？ヴィルジリオは、ローマの文人である。そして、ローマ文化は、ラテン語でギリシャ語のギリシャ文化から自立したように、ダンテはイタリア文化をイタリア語の基礎となるトスカーナ語でラテン語のローマ文化から自立させよ

うと試みた。ギリシャとローマの伝統を継承しつつ、自らの故郷のことばで貫かれた文学を通して、新しい文化を創ろうとしたダンテの挑戦である」

ダンテはヴィルジリオに伴われて、地獄を降りていく。その時、ヴィルジリオはこう語る。「畏れずに、ついてきなさい」。そこには、一見相反する考えがあるように思われる。「怖気づくことはない、勇気をもちなさい。しかし私の後ろについて離れるのではない。学ぶ謙虚さをもちなさい」。地獄の谷を降り、浄火の山を登るヴィルジリオとダンテの姿に、私たちは師弟のあり方の理想の姿を見ることができる。それは、うらやましいほど美しい。しばしば、失神し、泣き、震えるダンテがいる。そしてそういうダンテを抱きしめるヴィルジリオがいる。ふたりで地獄最大の断崖絶壁を飛び下りる時、ダンテは「どうかわたしを抱きかかえてください、とお願いしようと思っていたらその思いを声にする前に、私は先生にだきかかえられていた」と書いているが、まるで幼児が母に甘えているようなダンテを、私たちはそこここに見出すことができる。

異教徒のヴィルジリオは、天国に行く資格を持っていない。だから、ふたりの旅には別れが来る。ダンテが、ついにベアトリーチェに会う時だ。ダンテはその瞬間をこう記す。「走って母にすがりつく幼児のような思いで左に立つヴィルジリオに、あぁ先生、昔の思いが今蘇って全身の血が煮えたぎるようです…と言おうとすると、先生の姿がなかった。私は思わず名を呼んで叫んだ。ヴィルジリオ！ヴィルジリオ！ヴィルジリオ！なつかしい、苦しくてすがってきたお父さん」そして、ダンテは号泣するのです。

山川丙三郎の日記

1990年春、私は、山川丙三郎の日記を読む会を開いて、週に一度のペースで読んでいた。メンバーは、私と二人の東北学院大学英文学科の学生だった。その日記は、当時ハワイに住んでいた山川の長女恵さんが提供してくださった山川のあまたの遺品の一つで、膨大な数の日記は格別な意味を持って

いるように思われて音読を始めたのだ。

山川の日記には日常の細々としたことが小さく几帳面な字で淡々と記されている。毎朝必ず庭を掃いていたこと、いずれ『アエネイアス』を翻訳したいと思っていたこと、戦死した長男の浄さんや二男の純さんへの思いが死ぬ直前まであったこと…しかし、ある日、普段とは異質な調子の記述を見つけた。昭和12（1937）年3月28日のものだ。この日、山川は、大阪の大賀栄慈氏より手紙をもらう。父壽吉の逝去の知らせであった。

山川は動揺した筆でこう記している。「万感胸に迫り茫然自失す…」。山川を茫然自失させた大賀壽吉とは一体どんな人物なのか？私は、この時山川研究の鍵は、大賀にあると思った。

そして、京都大学に旭江文庫と言う名の大賀壽吉の蔵書があることを知ると、私は京都に行かなければならないと思った。1990年夏、私は祇園祭の最中、京都大学附属図書館にいた。旭江文庫の目録が作成された昭和16年に、当時図書館長だった本庄榮二郎氏は目録の序で寄贈者である大賀壽吉と文庫についてこう述べている。

> 本書は故大賀壽吉の舊蔵に係る旭江文庫の目録である。
> 旭江文庫の名は、氏の故郷岡山を貫流する旭川に因みて氏が号せしによる。氏は夙に伊太利の詩聖ダンテに深く傾倒し、之が研究に没頭したが、竟にダンテ文献の蒐集に着手し、貴重なる原典はもとより新聞雑誌の断簡に至るまで、洋の東西を問わず百方手を盡して之を求め、而も一定の方針に準拠して之が蒐集に力めた。その労苦の多大なりしこと察すべきである。かくて文庫の總册数三千に垂んとし、且つ整然たる体系を保てる一大集書を見るに至った。

私は、膨大なダンテ文献に驚愕しつつ、図書館には書簡がなかったことと、現図書館長さえも今は大賀壽吉の血縁とまったく関わりがないことに落胆し

ていた。山川に宛てた大賀の手紙は仙台のどこかにあるとして、山川の大賀への手紙は、かなりの確率で京都大学に保管されていると考えていたからである。私は、わざわざ、京都まで来てこのまま帰るわけにはいかないと思って、苦肉の策をとった。京都ＮＴＴに出向いて、関西エリアの電話帳を拝借し、大賀という苗字で、しかも壽吉か長男の榮滋の名の一文字を持つ人物を選び出し片端から電話をしてみたのだ。しかし、なんの手がかりも得られず、私はもちろん祇園祭を見ることもなく空しく仙台に戻った。

京都から戻ると、関西弁で吹き込まれた留守番電話の声が私を待っていた。電話の主は、武田薬品人事部。タケダタケダタケダ～の武田だが、身に覚えがない。翌朝、早速電話を入れると丁寧だが緊張した口調で「大賀さんについて、どんなことを調べてはるんですか？」と問われた。寝耳に水とはこのことで、私はまず、どうやって私の自宅の電話番号を知ったのか訝しく思ったが、そんなことを聞く余裕もなく、薬品とは無関係でダンテの研究をしていることを述べると、声が和らいで「大賀は私どもの会社の先々代の社長の渉外顧問をしてはりましたが、ダンテの本を社長の許しを得て薬と一緒に取り寄せていたようですわ。そやけど、今はまったくつながりがありへんな～」と。

私は、あたかも松本清張の小説に登場する刑事のように、仙台から京都に旅を続けた。不毛のように思われることがしばしばであったが、山川の大賀への手紙が大賀の暮らしていた関西にあることだけははっきりしていて、山川の手紙が見つからなければ山川ダンテの研究が前に進まないという考えが、私の足を京都に向けることをやめさせなかった。

山川とのめぐりあい

私はなぜ山川書簡に執着したのか？それは、私と山川に目に見えないつながりがあるような気がしてならなかったからだ。この旅を続けながら、それが研究の業績になるとか、いずれ学会で発表をしようとかは不思議に一切念頭になかった。純粋な好奇心であった。たったひとりの旅だが、さびしさに

わくわくしもした。研究者になって東北学院に戻ってきてほんとうによかったとさびしさの中で思い始めていた。

思えばその始まりは、受験勉強をしていた私に国際基督教大学の存在を教えてくださった東北学院中高教師大木騏一郎先生にある。1974年、大学の国際性に惹かれて志望校を変え国際基督教大学に入学した私は外交官を目指して勉強し始めたが、赤緑色弱者は受験資格がないと知って落胆していた頃に、たまたま受講していた齋藤和明先生の英文学講義に圧倒されて、結局英国留学するまでになった。留学先のエクセター大学の相部屋の英国人は鉱物学専攻だったが、毎日漫画でも読むように夢中になって読んでいた本があって、それが他ならない『神曲』(ドロシー・セイヤーズ英訳本)。帰国すると齋藤先生が教会で『神曲』読書会を始めていて、そのテキストが岩波文庫の山川訳『神曲』だった。がしかし、私の関心はどこまでもシェイクスピアにあって、イタリア語など読めなかった私は、齋藤先生の月2回の読書会に10年ほど真面目に愚鈍にいた。そのうち、こんなに長く大学にいたのでは将来に不安があると思って取り始めた教職課程の一環でどこかで教育実習と言うものをせざるをえず、それならば懐かしい母校にしようと、10年ぶりに故郷に暮らして、今のウェスティンホテルの聳え立つ場所にあった東北学院中高に通い始めた。東二番丁の横断歩道で信号待ちをしていたある朝に、偶然お会いしたのが当時東北学院大学英文学科助教授の遠藤健一先生だった。遠藤先生は、私が高校2年の時大学院生として非常勤で中高に教えにいらしていて一年間お世話になった。そしてほどなく、東北学院が教養学部を発足するにあたって、あの横断歩道での再会がきっかけとなって、国際基督教大学教養学部出身の私に声がかかったのである。まるで、ビリアードを見ているような山川ダンテに向かう運動だ。

私の専門はシェイクスピアである。しかし、曲がりなりにも学者となって学会発表というものをするようになって、学会や大学の紀要に論文を書いているうちに、シェイクスピアは舞台人だったはずだ。そうであれば、彼の作

品を真に理解するためには大学人としてではなくて舞台人としてあるべきなのではないか？という疑問にぶちあたって悩み始めた。

そんな時、齋藤和明先生の読書会でぼんやりと読んでいた、山川訳ダンテのあの冒頭を思い出していた。「我正路を失ひ　人生の羈旅半ばにあたりてとある暗き林の中にありき」。「人生の半ば」とは35歳。ダンテが故郷を追放された歳だ。そして、偶然私も35歳だった。このダンテは私だ。気がつけば大学を飛び出して、街の市民会館の一室で『神曲』を解説する教養も力もないのに、「『神曲』読書会」を始めていた。メンバーは50人に及んだ。その模様が幾度か新聞にとりあげられたこともあって、間もなく東北学院百年史各論編編集員の竹井一夫氏から山川丙三郎について書くことを依頼された。私には書くべきなにもなかったが、断ってはいけないような気がして、読書会で「身の丈を越える仕事を頼まれてしまったので、山川について何か知る人があれば教えてほしい」と訴えると、瞬く間に続々と、山川を直に知る人たちが手をあげてくれた。齋藤和明先生のダンテノートを頼りに難解な『神曲』必死に読みつつ、私は山川丙三郎という人物を追いかけるという新たな宿題に向かう。そしてこの時、私はこれまでの偶然がすべて必然なのではないかと思った。そして、ばらばらの点がいつか線になるような気がした。

山川丙三郎とダンテ、そして大賀壽吉

古典中の古典と言われる『神曲』を訳した、私たちの先輩の山川丙三郎とは一体どんな人物なのか？そして、山川はなぜダンテに関心を持ったのか？素朴な疑問が私を動かしていた。

山川丙三郎は、1876年新潟県北蒲原郡に生まれた。山川家は、新発田藩十万石溝口誠之進の家臣で士族である。新潟市の北越学館に入学し受洗するが、北越学館解散によって16歳の時に東北学院に編入。当時、東北学院の声望を聞いて集まった学生たちは、ほとんど苦学生で労働会に属していたが、山川は毎日登校前に新聞配達をしていたようである。しかし、山川は演劇部

員でもあって、小柄で長髪だったためによく女役をさせられていたようであるから、学生生活を楽しんでもいたようだ。

山川と『神曲』の出会いを考える時、最も興味深いのが、1896年に東北学院に赴任してきた島崎藤村との触れ合いである。その時山川は20歳で文科2年、図書係として働いていた。川合道雄は父の『山月子回顧ノート』の中で、藤村が山川と渡辺という二人の学生と松島で舟遊びをしたことを書いている。波間に小舟を浮かべての繊細な会話とやりとりを山月子に伝えたのは渡辺で、その話を川合が聞いて記録している。山川に会う5年前、『神曲』の英訳を読んで心を震わせた藤村が、ダンテとベアトリーチェのことを、「地獄篇」のパオロとフランチェスカの恋について話したに違いないと想像するに難くない。

その後、山川は渡米しカリフォルニア大学に留学する。山川が大学で正式にダンテを学んだという記録はない。しかし、ヨーロッパの影響を受けて空前のダンテブームに沸いていたアメリカのアカデミズムに浸っていた山川が、そこここで様々な形でダンテに触れていたことは間違いない。

山川は、ドイツ語、フランス語、ギリシャ語、ラテン語、更にスラブ系の言葉まで学んだが、特筆すべきは彼の中世英語に見せた卓越した力でアメリカ人を抜いてトップの成績だったことだ。山川恵さんの「父は、ヴァイオリニストになりたくてアメリカに渡ったそうです」という言葉は、山川が『神曲』翻訳にあたって発揮する音に対する並外れた感性が、既に青年の山川にあったことを示している。

滞米年数はおよそ10年。帰国は1912年頃と考えられる。そして、1914年に警醒社から「地獄篇」が出版された。帰国後、山川がどのようにして『神曲』翻訳に手を染めていったかはわからないが、山川が師と仰いでいた新井奥邃の思想が大きく影響していたことは確かである。それにしても、翻訳に費やされた時間は2年にも満たないもので、一気呵成の仕事であったことがうかがわれる。

1915年山川は、故郷新潟にいた母の断っての願いに応えて結婚する。山川は39歳、新妻直は22歳、新居は東京の本郷。山川には定職はない。生活費は、東北学院の仲間たちの支援金だけだった。極貧。足袋は兄のお下がり、下駄は中古、着物はいつも羊羹色、山川は寝ても覚めてもダンテ。時折、夫人のこよりでキセル入れを作る内職を手伝った。山川は手先が器用で夫人のよりも10銭高く売れた。

日本で初めて完訳された「地獄編」への評価はどうだったのか？その評価の典型的な声は「讀賣新聞」に聞くことができる。

「本書は日本のダンテの先駆をなしたもの。訳しぶりは原書と比べないからなんとも云えぬけれども兎にも角にも世界の名作が一巻になって現れた事は注目に価すべき事である…」

山川は、既に「浄火編」の翻訳に取りかかっていたが、心は晴れなかった。英語ならまだしも、イタリア語を読める者などいない時代に、難解な『神曲』ならば誰も読んでさえいない。しかし、山川に一条の光が刺す。それは、大賀壽吉の次の言葉だった。

「神曲第一篇地獄界を入手していひ知らぬ喜びに溢れたものである…よくもかく迄に訳されたり、第三歌地獄門上の銘の如き、数多き英仏独の訳書中にも満足なるはなしといはるるもの、わが国語訳に今これ以上は求め難かるべし」

まさに絶賛である。それも、その比較の対象は日本を越えているところに、大賀と言う人物の大きさと深さがある。大賀は、ただ褒めちぎっているのではない。助言は翻訳は言うまでもなく注釈、用紙、印刷、装丁に及んでいる。

ここから、大賀と山川の友情が始まる。大賀は、あたかもヴィルジリオがダンテにそうであったように、山川を支え励まし、「浄火篇」翻訳に喘いでいた山川に命を注いでいった。そんな折、山川が「地獄篇」出版直後、山川をなんとか東北学院教授として招こうとしていた人物がいた。山川と同郷の出村悌三郎である。しかし、一切職に就かず『神曲』翻訳にすべての時間を

注ぎたいと考えていた山川は、出村の再三の要請に応えることはなかった。出村が山川から承諾を得るのは5年後の、1919年「天堂篇」の第一稿ができあがった時である。

1921年「天堂篇」が出版され、山川丙三郎訳『神曲』が完成する。そのことについて、高村光太郎はこう書いている。

「神曲がこんな立派な日本語になって私等はじめ此れからの人々に読み味ふにまかされた事は真に一大事と思ひます。此の事に就いてあなたは私等読者からどんなに感謝しても尽きない気がします。此の夏を通して又私は食べるように読む事でせう。今からその時のうれしさを想像します」

東北学院で山川は一体どんな教師であったのか？私は、『神曲』から離れた山川の姿に興味を持った。

山川は、英語と英文学の授業の準備に多くの時間と精力を注いでいた真に教育の人であった。教室に現れるその姿は「和服姿に靴、ハードカラーに蝶ネクタイで髪は蓬髪」と言う風で、声は「低く澄み切って美しかった」と教え子たちは語っている。月浦利雄の「あてられて訳をさせられてこっちの訳が間違った場合『さうでないでせうがな…』とやさしく何となくふくみのある声でやられるのです」という思い出は、山川の温かい人間性に触れて心に残る。

1932年師範科長に就任した山川は「現代教育の諸問題に就いて」と題する座談会でこう語っている。

「キリスト教主義の学校の使命は愛にあります。今日教授と学生との間が未だ十分に親密ではないが、教育は愛の実践であって、単に学問の教育ではないのですから授業時間だけでなく、教室の外に於いても教授が学生に対してもっと親切にいたわってやるというやうにしたいものです」

この言葉に、私はダンテ『神曲』に人生を賭けてそこから人間とは何かを学び取った、山川の神髄を見る。

大賀壽吉という人

山川の書簡を探す旅を続けて15年が過ぎたころ頃、私は力が尽きかけていて、京都への旅を休んでいた。そして、ここから先は、本職の探偵か弁護士の領域なのかもしれないとも思い始めていた。そんな時、仁昌寺正一先生から声がかかって「創設者の事績を通して東北学院の建学の精神を明らかにする」というプロジェクトのメンバーに加えられた。2007年のことである。もちろん、「もう私の手には負えない仕事です」と申し上げたが、「書簡に限らずどんなことでもよいので、更なる調査をしてください」という仁昌寺先生の熱意に致し方なく、また動き出した。

関西に土地勘がないことが私の大きな弱点だった。私はこれまでの一連の歩みを「山川ダンテプロジェクト」と名づけて、本格的な調査に乗り出そうと考えていた。それが可能かもしれないと思えたのは、不思議なタイミングで、東北学院大学下館ゼミの一期生である松田(旧姓坂本)公江氏が、京都府立医科大学准教授の夫君の仕事で京都に住んで長く、子育てが一段落したことを耳にしていたからである。私は、その松田氏にこのプロジェクトの助手を依頼し、一緒に大賀の子孫の所在をたどる計画をたてた。その松田氏から「武田薬品大阪工場の敷地内に杏雨書屋(きょうういしょおく)という図書館のようなものがあるらしい。大賀がかつて武田の人間であったならば何か見つかるかもしれない」という情報が入ったのは、それからしばらくしてからのことで、私はその図書館に期待をかけた。

ちょうど20年前の1991年夏、京都から帰って聞いた留守電のことを思いだして、武田薬品人事部に電話をかけてみると、成尾さんという方が大変親切に対応してくださって、杏雨書屋には大賀の書籍も書簡もないことがわかった。しかし、私は大阪の武田薬品に行ってみなければならないと思った。

私は、神戸の御影にある武田資料館の前で成尾さんに迎えられた。

資料館と言っても、それは1932年に六代目武田長兵衛の居宅として造られた英国チューダー様式のマナーハウスで、まるで迎賓館のような建物の絢

爛さに私は圧倒された。実は、武田資料館の館長でいらした成尾憲一博士に「これが武田の家訓です」と示していただいた「社会奉仕・陰徳」という言葉を耳にして、私は、五代目武田長兵衛と大賀壽吉のやりとりが、まさに今ここで聞いているように鮮やかに耳の奥に響くのを感じていた。このお屋敷ではなかったにせよ、この優雅さと勝るとも劣らない雰囲気の中で、大賀は五代目長兵衛に、仙台の東北学院に山川丙三郎という人間がいて、今、全身全霊で『神曲』の翻訳に取り組んでいることを、その翻訳の完成を支援することが日本の文化の熟成にどれだけ大きな意味をもっているかを、熱く語ったにちがいないと直感したからである。その大賀の言葉を、悠然と微笑みながら聞いていた五代目長兵衛の思いを私は感じた。その瞬間、私はこれまで気がかりだったことが解決したような気がして、鳥肌が立って、目に涙が滲んだのを覚えている。

大賀が武田薬品の渉外顧問をしていた時に、しばしば、英国、アメリカ、独逸、フランス、イタリアから極めて貴重なダンテ作品の原書や新刊本を、医薬品と共に輸入していた形跡があって、その費用は長兵衛の特別な計らいで、当時はまだ個人商店であった武田長兵衛商店によって、支払われていたと考えられる。そのことは、次の一文が示唆している。

> 大賀さんは当時ロンドンのウィリアム・ダフという代理業専門店との通信のついでに自分の読む本を店の費用でとり寄せていたが主人は何もやかましく言わなかった…しかし、大賀さんは本が着くと、これを読みたくて本を持って、店からサッサと帰宅するので、和敬翁（五代目長兵衛）は欧文の手紙や電報などを大賀さんに書いて貰うのに、追っかけ廻すような事が度々であった。
>
> （『武田和敬翁追想』竹田義蔵著1960年）

現在とは比較にならないほど高額な書物を、長兵衛の「社会奉仕と陰徳」の精神に基づいた行為によって、大賀は手にすることができ、その書物を仙台の山川にも送っていた。送っていたことがわかったのは、京都大学附属図書館で見つけた論文による。それは『日伊文化研究』と『イタリア学会誌』に掲載されていた「大賀壽吉の書簡—大正ダンテ研究の一断面」であって、その著者が他ならぬ木村文雄であったことに愕然とした。というのは、木村が大賀の書簡を持っているはずがないからである。山川恵さんもこのことには驚きを隠さず「いつの間に父の書斎からどんな風に持ち出されたのか？」皆目見当がつかないと語っていた。その論文の附記に「本書簡は散逸を恐れて東北学院大学図書館に寄贈した」と記されているが、事実、東北学院にこの書簡寄贈の記録はない。何よりも自分のものでもない書簡を遺族の許可も得ずに「寄贈」とは、全く不可解である。木村への疑念は、この論文を見つけてから、私の中で増幅していった事は確かである。

この書簡から読みとれるのは、これまで恐縮しながらも大賀から参考文献や批評書を送られるままでいた山川も、これからは私がお支払いすることを認めていただかないと困りますと主張していたことと、その後は仙台はもちろんのこと、東京のどの書店でも入手不可能と思われる本は大賀に注文してもらい、受け取ってから支払いをするという形になっていったということである。

腑に落ちなかったのは、大賀が無償で山川に本を提供してきたということである。しかし、長兵衛がその大賀の行為を知っていながら大目に見ていたと言うよりは、大賀が輸入していた本の一冊一冊について長兵衛がいちいちチェックしたり口を出したりすることなく、むしろ長兵衛は「おまえの好きにしたらええ。お金のことは心配せんでええ」と大賀に言えるほど、大賀は長兵衛から厚い信頼を得ていたと考えるべきであって、その信頼にもとづいて、長兵衛は山川の仕事の価値の大きさをも十全に理解していたということに確信をもつようになった。武田の資金力の後ろ盾があって大賀が蔵書を

得てついにはそれらが京都大学に寄贈されたことについても、篤実なクリスチャンであった大賀が武田の名を記そうと強く申し出たにちがいないが、長兵衛は「ええんや、おまえが選んでこうたんや。武田の名は出さんでええ」と真顔で言ったのではないだろうかと、私は想像していた。

御影を後にした翌日、私は書簡はないことを知りつつも、大阪は淀川にある杏雨書屋を訪れた。前野哲也事務局長が丁寧に出迎えてくださって、書簡がないことを残念がってくださったが「あるのはこれだけです」と大賀壽吉の写真を見せてくれた。大賀の写真が大切に包まれている紙をおそるおそる開くと、大賀の大写しの横顔が目に入る。白髪交じりの髪、大きな目、高い鼻、痩せた首、着物姿。一種厳粛さがあって、その雰囲気には憂愁さえ感じさせられる。写真の下には、J.Ogaとイタリックスの自筆のサインがある。私は、なぜかイタリアのラヴェンナで見たダンテの肖像画を思い浮かべた。

私は、じっと大賀の写真を見つめて、思わず心の中で「大賀さん、一体あなたはどちらにいらっしゃるのですか？」と問いかけていた。

お礼を言って去ろうとした時に、前野さんがおそらく私に見せようとしたにちがいない一枚の紙に目がとまって、普通ならば、人の持ち物にこんな聴き方はしないであろうに、「それはなんですか？」と聞くと、「いやこれは下館さんがもう持っていらっしゃるでしょうから必要ありません」という答え。やはり大抵は、ここでそうですかと諦めるであろうに、私は妙にしつこく「いや、ちなみに何ですか？」と。周りから見ると、ちょっと滑稽に思われるやり取りの直後、「これは京都大学広報誌です」と前野さん。その時、ちらりと見えた題名は「旭江文庫と大賀壽吉」で、私は心躍った。書き手は、京都大学附属図書館の赤井規晃氏。

書簡発見へ

私はすぐに京都大学に連絡をとったが、赤井氏は随分前に大阪大学に転勤になっている。時間切れであった。仙台行きの列車の時間が近づいていたか

らだ。途中赤井氏の「ダンテへの多大な貢献」(『紅萌』)をむさぼるように読みながら、赤井氏にまるで生き別れになった兄弟のような共感をもった。2004年に私と同じことを調べていた人間が京都にいたことが不思議だった。私は山川を捜している。赤井氏は大賀を探している。しかし、私は今山川を見つけるために大賀を探しているわけで、赤井氏の持っている情報を、あたかも砂漠で水を求めるように欲しいと思った。まずは、赤井氏の言葉に直に耳を傾けて見ることにしよう。

> 大賀の蔵書のダンテ学への貢献の一例として、山川訳『神曲』の成立をあげることができる。大賀が山川に宛てた書簡は二百十通が遺されているが、それらを読むと、大賀の蔵書がいかに重要な役割を果していたかがわかる。大賀は、新刊や古書を入手するたびにその本の長所や短所を紹介し、欧米のダンテ研究の動向について最新の情報を伝え、校本の移動や誤植の指摘に至るまで、翻訳上有用と思われれば膨大な蔵書を駆使し助言を惜しまなかった。大賀の蔵書がなければ、山川も『神曲』の訳者として名を残さなかったと思われるほどである。

私は仙台に戻って数日後、赤井氏に電話をする。私たちは、興奮して時間を忘れて語りあった。赤井氏がこう話していたことが、印象に残っている。「どこからもまったく反応がなくてがっかりしていました。そのうちに調査をやめて忘れてしまいましたね。それが7年もたってから、こうして連絡をいただくんですから、感無量です」。

私たちは、数ヶ月後に京都で会った。お互いに今知っていることを確認し合いながら、いつか必ず大賀壽吉の子孫の方を見つけましょうと語りあった。関西に住み、更に大賀の子孫が関わりをもっていた京都大学附属図書館に勤務していた赤井氏は、山川ダンテプロジェクトにとっては頼もしい助っ人に

なると私は思った。赤井氏は、以前の調査で大賀の孫松井恵美子さんの居所をつかんではいたのだが、それ以上踏み込むことにためらいを感じていたという。しかし、私たちが出会ってから、赤井氏にかつてあった情熱が蘇ったようだった。私たちは、京都大学の赤井氏の元同僚に頼んで、かつて図書館にダンテの銅像を寄贈した松井恵美子さんに「ふたりの研究者が大賀さんのことでお聞きしたいことがあるようです」と伝えてもらうようにお願いしたが。それが、ふたりのアクションの第一歩であった。

私たちが出会って一年が過ぎた頃、電話で「手紙は送られているようですが、どうやら返事がないようです」言う赤井氏に、私は「こうなったら、ともかく大賀の住んでいたエリアの匂いを嗅ぎましょう。行ってみましょう」と言った。三週間後、大阪駅に着いた私を待っていたのは、「不思議だな〜」という顔の赤井氏であった。「なんと昨日、返事が来たんですよ。そして、個人情報だから住所は教えられないけれど、赤井さんが調べた所の近くであることは間違いないと」。

私は、大賀も私たちに会いたいのだと、確信した。そして私と赤井氏と助手の松田氏は、すぐさま大阪の大賀の住居に向かった。聖天坂。ここに大賀は土地を求めた。その名前から『神曲』の煉獄と天国を連想したのは、私だけではなかったと思う。いよいよ近づく。松井の表札の前で、しばらくうろうろしていると、同じ敷地に住んでいる女性が「松井さんは亡くなられて、娘さんが時々いらっしゃいます」と。そして、「ダンテのことで」と言うと、目を丸くして驚いて、私たちを警戒するでもなく大家さんであるところの松井さんのご長女の竹本久美子さんの携帯番号を教えてくれた。

そして、電話を通して、時を移してお会いしたいと言うことを伝えた。赤井氏は、先のことであれこれまでの空想の大賀の世界が現実になることに興奮していたし、私は20年前に見つけようとしていた人が、ついについに…という感慨で胸が熱くなった。そしてそれから二ヶ月後、私たち三人は、大阪のホテルのロビーで、大賀壽吉の曾孫にあたる竹本久美子さんにお会いす

ることになる。竹本さんは、大変気さくな方で、ご自分の父つまり大賀の孫娘松井恵美子さんの夫は、安宅産業最高顧問であった松井弥之助で『会社再生』という阿部牧郎の小説のモデルであったことや、大賀の長男榮滋の妻、つまり竹本さんの祖母は、大変なお転婆であったことや、大賀が大変な凝り性で、今は取り壊された家が本格的な西洋のお屋敷であったこと、そしてなぜか知らないが大変な資産家であったことなどを話してくださった。とてもなごやかな雰囲気の中で二時間ばかりお話しさせていただいた。私たちは一刻も早く、大賀の遺品が見たいというはやる心があった。しかし「大賀壽吉の遺品はすべてあの聖天坂の母の住いにあるはずだけれども、母の死後は整理していないので、いずれいろいろお見せできるようにしましょう。時間をください」という言葉に、ここまで来れば後はゆっくりと思って私たちは、竹本さんと別れた。

私と赤井さんは、坪内逍遙が東京大阪間の列車の中で偶然大賀に遭遇して、大賀からダンテの話を聞いたこというエピソードを思いだしていた。逍遙は日記に「薬屋の番頭さんもたいしたもんだ」と書いている。その番頭さんの大賀が山川を支え、その後ろに武田商店があった。そうであろう。なぜならダンテの蔵書は一介のサラリーマンの財力の枠を超えているからだ。

大賀は、しかし、武田にとっては武器であった。宝石であった。大賀無しでは、輸入で富を得た武田はなかったはずだ。すると、五代目武田長兵衛は、人徳のある旦那さんだったにはちがいないが、大賀とは意外に対等の関係にあったのかもしれない、と。大賀を「追っかけ廻す」武田。それは、社長と使用人というよりは、社長と社長が一目も二目も置いている男の関係といったほうが、落ち着くかもしれない。

しかしもちろん、これは空想である。2013年6月、私たちはいよいよ大賀壽吉の遺品に会う。そして書簡を手にする。今、私たちは新しい扉の前に立った。

＜参考文献＞

・赤井規晃「山川訳ダンテの生みの親―忘れられたダンテ学者大賀壽吉について」『東北学院英学史年報』第35号, 2014.

・下館和巳「山川丙三郎と『神曲』」『東北学院百年史：各論篇』, 1991.

・下館和巳「『神曲』翻訳の謎―山川ダンテとのめぐりあい」『キリスト教文学研究』第30号, 2013.

・Kirkpatrick, Robin. *Dante's Inferno : Difficulty and Dead Poetry*. Cambridge U P, 1987.